開催予告

二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト

公開シンポジウム

興福寺に鳴り響いた音楽

教訓抄の世界

2019年8月17日(土) 13時—16時

奈良・興福寺会館

事前申込不要・参加費無料

信仰と音楽 磯水絵(二松学舎大学教授)

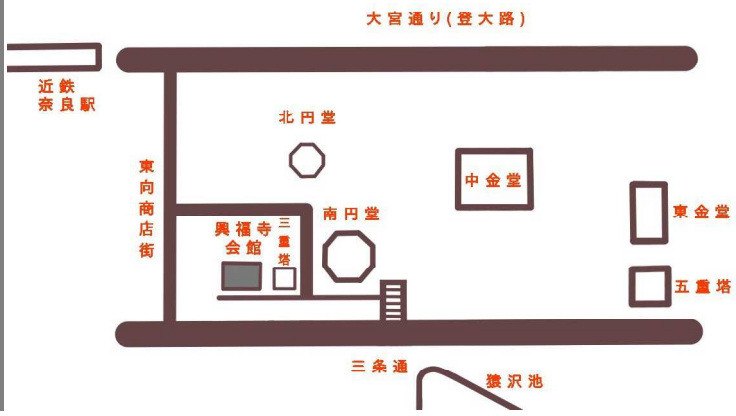
音楽の湧水地 興福寺 櫻井利佳(上野学園大学日本音楽史研究所講師)

狛近真の生涯 神田邦彦(二松学舎大学非常勤講師)

狛氏と伎楽の笛 根本千聡(法政大学大学院博士後期課程)

南都寺院の伎楽曲の「再生」に向けて スティーヴン・G・ネルソン(法政大学教授)

【お問合せ】 〒一〇二—八三三六 東京都千代田区三番町六—一六 二松学舎大学 一号館九階九一四号室 磯水絵研究室内 教訓抄研究会
電話 〇三—三二六一—一三八二(研究室直通。案内後九一四を押してください) メール kyoukunshoukenkyu@gmail.com



二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同研究プロジェクト　公開シンポジウム

興福寺に鳴り響いた音楽

教訓抄の世界

2019年8月17日（土）13―16時　奈良・興福寺会館

事前申込不要・参加費無料

信仰と音楽　磯水絵（二松学舎大学教授）

恵心僧都源信作ともいわれる「三尊来迎和讃」の一節に、「聞けば西方界のそら　伎楽歌詠ほのかなり　見ればみどりの山の端に光雲遙かにかがやけり」と、阿弥陀来迎の様子は描かれ、また、『今昔物語集』巻七‐十六※に、「維摩経を読誦する時には妓楽・歌詠、虚空に満ちて其の音を聞く」と、天上の音楽が形容されるように、信仰の成就は天上の音楽で証明されておりました。仏教東漸とともにその音楽も日本にもたらされたといってよいのです。そうして、そのメッカが南都興福寺でありました。

※「震旦の定林寺の普明、法花経を転読して霊を伏する語、第十六」

音楽の湧水地 興福寺　櫻井利佳（上野学園大学日本音楽史研究所講師）

興福寺は奈良時代に現在の地に移って以来、とりわけ摂関政治の興隆とともに音楽芸能の国内最重要拠点となり、明治維新までその重要性は揺るぎませんでした。能楽における興福寺の歴史的重要性はすでに十分認識されていますが、そもそも能の興隆、発展も、雅楽という素地があってのことでした。現代は雅楽といえば宮廷や神社の音楽と思われがちですが、実は雅楽の最盛期にあたる平安・鎌倉時代には、宮廷を含めた楽を担い統括したのは、興福寺の楽人一族である狛氏を頂点とした楽人組織でした。

これまで興福寺講座では福島和夫氏及び新井弘順師（ともに上野学園大学日本音楽史研究所）、米田弘雅師（南明寺住職）等の講演により興福寺の楽や声明の重要性が説かれて来ましたが、今回は興福寺を含めた奈良の楽の形成期に着目し、興福寺や狛氏がどのように楽に関わったのか、その一端を探ります。

狛近真の生涯　神田邦彦（二松学舎大学非常勤講師）

狛近真は、鎌倉時代初期に活躍した舞人・楽人です。興福寺をはじめとする寺社や宮中で、代々音楽（現代にいう雅楽）に奉仕する狛氏の家を継ぎ、衰微する舞楽の伝承を絶やすまいと、その保持・継承に努め、楽書『教訓抄』を残しました。

雅楽は応仁の乱以後、戦国時代に衰退し、多くの伝承が失われました。安土桃山、江戸時代を通じて再興され、明治初期に再編されてこんにちに至りましたが、江戸時代以来の雅楽研究において、参照されてきたのが、この『教訓抄』です。日本音楽史上における近真の存在は大きいといえるでしょう。

その近真は、いま奈良県庁そばの拍子神社の祭神として祀られていますが、日本の音楽の世界でよく知られる彼が、一般にはあまり知られておりません。そこで、今回は近真の生涯を追いかけ、彼がどのように生きたのかを見て行きたいと思います。

狛氏と伎楽の笛　根本千聡（法政大学大学院博士後期課程）

興福寺にはかつて七月十五日の伎楽会という行事がありました。伎楽は音楽を伴う仮面劇のようなものであったと考えられていますが、その伝承は、中世にはほとんど途絶えてしまっていたようです。

さて、『教訓抄』には、伎楽の笛の伝承が次のように記されています。

予者、則成二令二相伝一侍也。ヲノヅカラ彼有光之流ノ絶ム時料也。更ニ競ヒ吹カム料ニハアラズ。此様ヲ心ユベシ。

ここにある「有光之流」とは、興福寺伎楽の笛を伝える狛氏の一流でした。『教訓抄』の編まれた天福元（1233）年ごろ、伎楽は細々と継承されつつも、絶伝が危惧されるほどに衰微していたのです。伎楽は四月八日の仏生会にも演じられていました。往時の興福寺の音楽に思いを巡らせる時、伎楽は決して無視できる存在ではありません。今回は、興福寺伎楽の笛について、この有光の流から、その足跡をたどってみたいと考えています。

南都寺院の伎楽曲の「再生」に向けて　スティーヴン・G・ネルソン（法政大学教授）

正倉院や奈良の寺院に残されている伎楽面や装束は、今でも見るものの想像を大いに掻き立てる力を持っています。一方、伎楽の音楽のこととなると、絶えて久しい音の世界を想像するにもその内容を知るすべもなく、もはや不可能であろうと思われがちですが、実は鎌倉時代の伎楽笛譜の写しに加えて、平安院政期の音楽家たちが、笛の旋律を絃楽器（琵琶や箏）の楽譜に書き換えたものも伝わっているのです。これらの楽譜を手がかりに、楽譜が編まれた当時の伎楽曲、あるいは遡ってより古い時代の伎楽曲がどのようなものであったかを、ある程度明らかにすることができるのではないかと思います。

今回は、その第一歩として、『天感楽外妓楽譜』※（宮内庁書陵部蔵、鎌倉期写）に書かれている伎楽曲の譜（琵琶譜およびその左側の大部分に付されている笛譜）を取り上げ、記されている旋律を「再生」するための方法について論じてみたいと思います。

※本資料の伎楽曲は《師子》のうち〈前舞〉・〈後舞〉・〈龍〉、《呉公》、《金剛》、《迦楼羅》、《崑崙》、《力士》、《波羅門》、《大孤》、《酔胡》、《武徳楽》（曲名のみ）となっている。

お問合せ　〒102―8336 東京都千代田区三番町6―16 二松学舎大学1号館9階914号室 磯水絵研究室内 教訓抄研究会
電話　03―3261―1382（研究室直通。案内後〔914〕を押してください）　メール　kyoukunshoukenkyu@gmail.com